

音楽は人とつながるためのことば

高いコミュニケーション さすが小美玉

小美玉市は、プロの演奏家が学校などを訪れ、息づかいを感じる距離で授業を行う取り組みを、町村合併前の2000年から行っています。10年前から出演している、作曲家・ピアニストで東京都現在住のMAKIさんにお話を伺いました。



作曲家・ピアニスト

ま き
MAKI さん

みの〜れと共に生活するスタイル
Minole Life
のすすめ

No.220

岡山県で生まれ育ったMAKIさん。母の友人が開いていた音楽教室をきっかけに、4歳でピアノを始めました。「テレビから流れてくる音楽も、楽譜がなくても弾けてしまつて」。小さい頃から音楽は得意だと感じていました。「音楽は人とコミュニケーションを取るための大切なツールでした」とMAKIさん。三姉妹でピアノを習っていた中でも、一番上達が早かったそうです。

した。「何度もふるいにかけて、今でも夢に見るほどです」。大学では教授との一対一のレッスンが続き、相性によってはスランプに陥ることもある、厳しくも濃密な時間を過ごしました。

学園祭では、自ら人を集めて音楽を発信する活動を展開。後の「code M」の前身となる取り組みでした。

ます。「子どもたちとの交流にここまで気持ち注げるようになったのは小美玉があつたから」。子どもたちの熱量に圧倒されながらも、先生や職員との距離が少しずつ縮まり、信頼関係が築かれていきました。

音楽の道に進むと決めたのは高校2年生の時。「クラシックの世界では遅い決断だったかもしれませんが」と振り返ります。大学進学を機に上京し、東京藝術大学作曲科へ。作曲には厳密なルールがあり、入学試験も四次試験まである厳しいもので

するには、自分で動かす場が必要でした」。セルフプロデュースしながら、少しずつ縁が広がり、個人から企業、アマチュアからプロまで、仕事の依頼が舞い込むようになります。「MAKIさんの曲を演奏したい」と言われた時は、本当にうれしかったです。作品が一人歩きし始めたと感じました」。

「行政職員という枠を超えて、アーティストを信頼してくれていると感じます」。立場は違っても、子どもたちにかかを伝え、何かを残したいという思いは同じ。チームとしてのづくりができる場所がみの〜れだといいます。アクティビティアーティストたちによるコンサート「総糸」のプロデュースを任せられたことも、小美玉への想いをさらに深めました。

10年前から、小美玉市学校アクティビティ事業アーティストとして、子どもたちの感性を育む授業をしている

顔で語ってくれました。

（藤田佐知子）